

◆ご親教「日進月歩」◆

盂蘭盆会うらぼんえ

導師現楠げんなん

世間では、七月もしくは八月になりますと「盂蘭盆会うらぼんえ」すなわち「お盆」が行われ、ご先祖さまの回向えこうや供養くようをするのが習なわしとなっています。皆さまも、ご宝前ほうぜんにてご回向されたり、お墓参りをされたりしていることと存じます。これは『盂蘭盆経』というお経に説かれていた物語が由来とされています。



お釈迦しやかさまの十大弟子の一人、目連尊者もくれんそんじやは、永年にわたるご修行の成果により、神通力じんづうりき（超能力）を授さずかりました。そこで亡き母親が、いまどこで何をしているか、自身の神通力をもって探してみました。

母親は、生前「慳貪けんどん（物惜しみ）」の罪を犯おかしていました。目連が母親の



ところへ托鉢^{たくはつ}に訪れた際、我が子にはたくさんのお食べ物を盛り、他者には何も与えなかったのです。

そのため、母親は、餓鬼^{がきどう}道に墮^おち、逆^{さか}さ吊^づりにされていました。

食べ物がなく、痩^やせ衰^{おとろ}え、ただひたすらもだえ苦しんでいたのです。

以前のような優しい笑顔の母親の面影^{おもかげ}は、まったくありませんでした。

変わり果てた母の姿に驚^{おどろ}き、悲しんだ目連尊者は、神通力で食べ物差し出し、助けようと思いました。

ところが、いざ食べようとしたところ、食べ物^{とつじよ}が突如として火の玉になってしまい、母親の身体が燃え始めてしまいました！

あわてて水をかけて火を消そうとしましたが、どうしたことが、水^{みづ}が薪^{まき}に変じてしまい、火の勢いがありますます激しくなってしまったのです。

困り果てた目連尊者は、お釈迦さまに助けを求めたのです。

お釈迦さまは、

「雨季のあいだ、大勢の僧侶^{どうくつ}たちが洞窟^{どうくつ}にこもり修行を行っているが、間もなく終わりを迎える。出てきた僧侶^{どうくつ}たちに、たくさん食事^{ほじこ}などを施し、亡き

母親の苦しみを救うべく、ご回向をするように」

と説きました。

教えの通りに僧侶たちを盛大にもてなしたところ、その功德くどくによって母親は、餓鬼道の苦しみから救われたのでした。



このことが盂蘭盆会の由来となり、ご先祖さまや亡き靈耶れいやの回向や供養を行う始まりとなったのです。



日蓮大聖人は『盂蘭盆御書』において、

「目連尊者もくれんそんじやが法華經ほけきやうを信じまいらせし大善だいぜんは我が身み仏ほとけになるのみならず父母ふぼ仏ほとけになり給うたま。上七代かみしちだい・下七代しもしちだい・上無量生かみむりやうしやうしもむりやうしやう下無量生しもむりやうの父母等ふぼとうぞんがい存外ほとけに仏ほとけとなり給うたま。乃至子息ないししそく・夫妻ふさい・所従しよじゆう・檀那だんな・無量の衆生むりやうしゆじやう・三惡道さんあくどうをはなるるのみならず皆初住みなしよじゆう・妙覺みやうがくの仏ほとけとなりぬ」

——目連尊者は、法華經を信じ奉った善根功德ぜんこんくどくにより、我が身が仏になるだけではなく、両親も仏になった。それに留とどまらず、過去七代、未来七代の長きにわたり先祖と子孫たちまでもが、思いがけず仏となることができるのだ。

さらに、縁のあるあらゆる人々に至るまで、地獄・餓鬼・畜生の三惡道の苦しみの世界に落ちることはなく、皆ことごとく初住から妙覺という最高の仏の位に至るのである。――

と、説かれたのです。

ご先祖さまや、故人の回向や供養をすることが肝要ということですよ。

さらに私たちは「常盆・常彼岸」という、み教えをいただいています。

お盆やお彼岸の時期だけに、回向や供養をするのではなく、毎日がお盆、毎日がお彼岸、という心構えで、常日頃からご先祖さまや故人に感謝し、追善供養を行うことが大切なのです。

お盆は私たちにとって「いつものこと」「当たり前」かもしれませんが、孟蘭盆会のお参りを営むことは、実はお釈迦さまのみ教えを自身で実践していることに他ならないのです。

計り知れないほどの功德をいただけるのではないのでしょうか。

お互いさまに、感謝の心を高めつつ、日々功德を積み重ねて参ろうではありませんか。